

あいりんの教育

1962-1984

22年。

あいりん教育の灯は次代へ

大阪市立新今宮小中学校
内井道夫

昭和59年3月14日、在校生からの卒業生を送る言葉もなく、来賓・教職員のはなむけの言葉を胸に3名の生徒が社会へと巣立っていきました。この子らに幸多からんことを……

あとには、大人だけの静かな校舎が残されています。



ここに59年度は学級編成が行われない学校ということになり、3月31日をもって22年あまりにわたって燃えつづけた「あいりんの教育」の灯もこの建物からは消えようとしています。

20数年の間、地域の方々や後援会、関係諸団体並びに関係各位からお寄せいただきましたご厚情・ご支援、それにあいりんの学園誕生以来教育に精魂を傾けられました多くの教職員の方々のご苦勞に心から深く感謝申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

いま、幕を閉じるにあたって、ここに、あいりんの教育の実践の姿や家庭や地域とかかわった記録等を「あいりんの教育22年」の小誌にまとめ、上梓することになりました。大阪の教育史の一頁としてご高覧いただければ幸せと存じます。

この冊子に取められなかったことがらや記録も多くありますがご容赦の程、お願いいたします。

さいごに、本校で育った多くの児童・生徒の前途に光あらんことを願って止みません。

手厚い福祉と教育の充実をめざした真のあいりん教育が、これからはすべての地域で、そして学校でより一層取り組まれますことを願ひまして、本校の閉幕にあたっての挨拶といたします。

草創のころ

初代あいりん学園校長
港 一敏

昭和36年8月1日、所謂釜ヶ崎事件が起った。その当時2-300名の不就学生があり、麻薬運び、石運び等をして非行に走る者もあったと言うことである。これらの不就学生のために特別な学校を造って、学校に慣らし、普通の教育ができるようにすることが地元の要望であった。早速その仕事を大阪市教育委員会がすることになり、私の家に事前の話があったのが9月の始め頃である。

12月と1月に市民会館で子供会をして、新しい学園に入学する児童を集めた。翌年の2月1日に西成警察署前の空地にバラックの2教室が出来、54名の小・中学該当の不就学生を集めて開校した。学校に慣れない子供達であるので、始めは遊びを中心として、体操・音楽・図工・そろばん・簡単な読み書き等を利用して指導した。着かない子供もあって、教室の屋根の上を走ったり、窓ガラスを割る者、先生に暴力を振る者もあった。しかし、8月になって新しい愛隣会館の4-5階に学校が移されるようになってからは、落書きひとつする者もなく、大分落ち着いてきた。やがて150名程度の在籍となり、毎年卒業生がそれぞれ就職し、又は進学して行った。

子供達が不就学になった原因の多くは、家庭の問題にあると思う。当時の統計によると、父子家庭が全体の3分の1、母子家庭が10分の1で、戸籍、住民登録のない者があり、実父母でない者も相当あったと思われる。なお職業の都合で住所の変わり易い者もあった。その他の社会悪も、その家庭をむしばんで居たであろう。このような環境の中で不就学になり、非行に近づいて行った子供達に罪はない。この環境を浄化し、子供達に正常な義務教育を受けさせるのは社会の責任であると思う。最近では不就学生も減り、新今宮小・中学校はこの4月から休校の状態になるとのことですが、誠に結構な事と思います。私は現在の実態を知らないのですが、一人の不就学生も見捨てられることなく就学し、一人の長期欠席生もない真の愛隣の教育がなされて行くことを期待するものです。勉強がらみの子供、家庭等に問題を持っている子供は何処でもいるでしょう。この子供達に真の親代りとなって世話をしあげて人がいてほしい。中には、戸籍、住民登録のないままの子供もいるでしょう。その手続を手助けしてあげる人もほしい。すべての児童が幸福に成長するようにと祈るものである。

悩みもしたが 生きがいを感じた2年間

元あいりん小中学校長
宗田徳義

初代港校長のあとを継いだ時は小学生49名、中学生21名、職員27名の組織で、あいりん会館の4、5階をベニア板で区切って教室にし、屋上を運動場としていたが宿願の校舎建設の話もすすみ職員一同活気に満ちていた。

学校の存在は、土のある運動場付きの独立校舎が建つということで新聞、ラジオなどがよく取材に来て一般に知られるようになったが、学校の内容については、同区内の教師でさえあまり理解されていなかった。

指導部も基本的には普通学校であると解釈している以外、特に拠り所になる指示もなく、校舎建設を目前にして自ら進むべき道を生み出さねばならなかった。

学校の性格をはっきりさせて、職員集団の共通理解を深めるため、子ども達や、それを取りまく環境の実態の把握に力を入れ、市教委、地域、外部団体などとの連けいを密にして、校内職員研修会をひんぱんにおこない「あいりん小中学校の将来構想について」という題目の要望書を提出するまでに至った。

職員は時には無理解な親のため、せつかくの苦労を水泡に帰すようなことにあったり、正常な教育活動を阻害されて、初志を貫徹せず去る人まででたが、子ども達に社会へ出て生きぬく力を与えるためには、私たち職員が日々の問題に屈することなく生きぬくことこそ、児童生徒に対する教師の姿勢であると信じ、互いに協力しあって、明るさを失わなかったのは思い出の一つである。

校名変更を考えたり、近隣5校の協力体制づくりをはじめたのもこのころであった。

建築については将来、養護施設や児童図書館、また児童館のような地区の子どもに役立つ施設に転用できることを願い、敷地や階段などについて意見を述べたが、どうにもならなかった。

前述の要望書の中に（本校のような性格の学校が、いつまでも存続するような社会状態が永く続くことは決して望まないが、現に不就学児がかなりいて、一般校にこのような子どもを収容する設備と能力がない間は、本校の果している役割は大きくその存在は必要である）と、当時記述したが、きびしい社会情勢がつづくなかで子どもを取りまく環境は、決して良くなったとは思えない。今、休校の報に接して感慨無量である。

大阪市立荊田北小学校長
宇治丸 要

昭和36年8月1日、突如として起った釜ヶ崎事件を契機として誕生した「あいらん学園」が今、その22年の歴史を閉じようとしている。大阪市の教育の一頁に永く残るであろうその教育に、開設より7年間打ちこんだ情熱は貴重な体験として、今も脈々と心の中に生きている。

開設当時の学園は、仮設3棟の校舎で始まった。中学部・小学部各1棟、今1棟は職員室、保健室、現業員室と倉庫が衝立てで仕切られた、まことに粗末なものであった。

その中で、一日も早く遊びの生活から脱し、喜んで登校してくれる子どもたちの学校になるよう、ただそれだけを願って情熱を燃やした。学園経営の重点も「喜んで登校させる」ことであった。朝の登校を促す家庭訪問、日々の本校からの給食運搬・種々の行事の工夫、不就学児を求めての地域への進出、夜を徹しての会議や討論会等、すべて設立の趣旨をふまえた教職員の主体的な実践であった。それは試行錯誤の毎日であった。

この地区の教育では、特に親の理解と子らと教師が相互に信じあうこのましい人間関係こそが何よりも重視されなければならない。なぜなら生活に追われ、故郷をあとにした子らの家庭は多くの悩みと生活苦にあえいでいる。そんな状況ではとても話しあうゆとりもなく、閉鎖的になるのは当然であろう。

「自分たちは何のために、この学園に赴任したのか」と自問し自らその家庭の中にとび込む以外に解決の糸口も見出せない。それで、時間や場所を考えず気軽な訪問による話しあいが続いた。

回を重ねるにつれて内容も多岐にわたったが、解決の労は厭わなかった。その結果多くの人と交流ができたし、心のなごむ子らの変容もあった。教職員が互いに心を通じあい、励ましあって組まれたスクラムこそが何より力つよいものであった。

基礎学力をつける努力も当然のこと、その成果は時々自主発表する形で行った。行事も工夫と努力によって実施した。それは戦争のような緊張と息つく暇のない日々であった。

最後に、近年よく問題となる校内暴力は、当時の学園では毎日のように起っていた。教師は恐れず誠意をもって対応し続けた。それが毎年訪れる涙の卒業式となって現われた。教師は生徒の幸福を、生徒は将来の発展を誓いあう送別のシーンは、今も心に焼きついて離れない。教師の姿勢こそが、子らのすきんだ心をよみがえらせ、やる気を起こす子になると信じてやまない。

元あいらん学園 教頭
伊東正一

私があいらん小・中学校に勤務したのは、学校として独立した昭和38年から45年までの7年間であった。“あいらん学園”の通称が示しているように、民生施設面をもつ学校であった。そして港一敏校長のもと全職員一致して使命感をもって教育に当り、苦難多かつたなかの一つの満足をもって過ごした。

在学した子どもたちは、いわゆる不就学・長期欠席であったものであり、野性的な子どもも多く、指導は大変困難であった。その子どもたちに戸籍・住民票を作り・学校生活に慣れさせることが使命であった。

当時、バラックだて仮校舎から移転はしたが、独立の校舎・運動場ではなく、民生施設である愛隣会館の4、5階を使用し、屋上を運動場代りにし、集会的諸行事は会館の3階を使用させてもらった。教育上極めて不備であったが、会館の館長以下全職員は最上級の協力援助をされ、同校の使命遂行の大きな力であった。

特殊な環境と経歴を持った子どもは、情緒不安定・学力遅進のものが多く指導は極めて困難であったが、全職員は使命を思い、体当りの指導と、時間を超越して指導に当った。通学の楽しさを味わわせるための諸行事の実施、学力をつけるための工夫、即刻の家庭訪問、放課後の指導や遊び、問題多い難しい親との対応——それは苦難の毎日であった。ただ子どもの向上を願う職員的情熱により教育は軌道に乗り始めた。子どもの戸籍、住民票を作るための担当囑託は代々温厚で粘り強いキリスト者の方々であり、献身的奉仕は独特のものであった。福祉施設も併行して行われた。

その間における市教委の特別配慮、会館の全面協力、区内有志・社会有識者の物心援助、ボランティア活動者の協力等々によって、子どもたちの姿は大きく変っていった。まことに「人は教育によってのみ人となることができる」(カント)という言葉をかみしめることができた。しかし、指導を要する子どもたちは次々と入学して来、職員の苦労は依然として続いたのであった。

いま同校は、在学する児童・生徒がいなくなり休校となるかと思われるのであるが、社会情勢、教育行政の進展による地区の向上によるものであればまことに喜ばしいことである。今後とも罪なき子どもたちがこぼれ落ちないような、常に温い思いやりを持った教育と行政を切に希うものである。